

Title	「物語世界の客体化」からみる自由間接話法の言語間比較
Sub Title	Free indirect speech focusing on "objectification on narrative world"
Author	橋本, 陽介 (Hashimoto, Yosuke)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2009
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.96, (2009. 6) ,p.96(181)- 112(165)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00960001-0112

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「物語世界の客体化」からみる 自由間接話法の言語間比較

橋本 陽介

0. はじめに

20世紀の文学において、自由直接話法や自由間接話法と呼ばれる技法は修辭的に重要な役割を担ったほか、ジュネットをはじめとする物語論などでも視点や語る声の問題のなかで活発な議論を呼んだ。しかしこれらの話法の理論は基本的に、英語やフランス語、ドイツ語などを元に考え出されたものであり、日本語や中国語といった言語形式の異なるテキストでそのまま通用するとは限らない。その形式としては従来、人称と時制が話法判断の主な指標とされているが、時制が表示されず、主語を省略できる中国語などではそもそも分析困難である。とはいえ間接度の調整までがないわけではないはずである。そこで本稿では、今まで行われてきた話法の定義の問題を振り返る。その上で本稿では新たに「物語世界を外から客体化するか否か」という観点から、今まで分析が困難だった日本語や中国語の分析について考える。また、従来はあまり区別して論じられていなかった自由間接話法内の間接度について考え、その言語間の対応について考える。

1. 自由直接話法と自由間接話法の定義と、その分析方法再考

自由直接話法とは、引用符、伝達節ともに用いることなく作中人物の一人称の発話を三人称の地の文に埋め込む技法で、特にジョイスの「ユリシーズ」における内的独白として有名になった。自由間接話法に比べ、容易に定

義できると考えられるのか、定義に関する詳しい議論はそれほど行われていない。ⁱそして自由間接話法と呼ばれるものは英語で free indirect speech、あるいは represented speech (描出話法)、ドイツ語で erlebte Rede (体験話法)、フランス語で le style indirect libre (自由間接話法)と呼ばれてきたもので、用語は統一されていないが、ほぼ同様の現象を指しているとされている。ⁱⁱまとめていえば形式上は引用符、伝達部とにもない地の文(つまり語り手の語り)でありながら、作中人物の内面を描出しているものであると考えられる。例えば「He would return there to see her again tomorrow.」という文では、間接話法なので時制と人称は語り手の視点になるが、最後に「next day」ではなく「tomorrow」とあるように、作中人物の発話的な要素が残っており、人物の発話・思考を語り手が半分代行しているということになる。ⁱⁱⁱ自由直接話法は登場人物の発話や思考を「直接」表出するが、自由間接話法では語り手と作中人物の発話・思考が入り混じり、二つの主体が入り込む。自由間接話法の妙味はこの曖昧さにあると考えられる。その文法的な形式指標としては主に、英語などでは(1)法助動詞 *aught to, going to, must, would* などの存在 (2) *certainly, perhaps, maybe* など、人物のパースペクティブによる副詞 (3) *now, today, tomorrow, here* などの時間・空間を表す直示的要素 (4) 疑問文、感嘆文などがあげられる。このほか、フランス語では単純過去形に対して半過去形が、ドイツ語では接続法に対して直接法がそれぞれ自由間接話法を表示する標識となる。しかし、McHaLe (1978) は以上のような形式的指標を挙げながらも、文法的には自由間接話法をそうではないものと分ける指標は英語においても明確ではないとしている。というのも、自由間接話法とは、語り手の語りでありながら人物の声が同時に含まれていると感じられる文であり、このような指標があれば必ず自由間接話法、と決定づけられるようなものではなく、地の文かどうか曖昧なものから、直接話法に近いものまでバラエティーがあるものである。中川(1983)はそれまでの自由間接話法の定義を整理し、それは一つの文法的な形態というよりも機能であるとし、その本質を語り手による作中人物の「模倣」としてしている。上記

に掲げた McHaLe (1978) らの形式的な指標も、一見すると文法的な記述のようであるが、根底にあるのは実は形式ではなく意味からの論理的な分析であることがわかるだろう。つまり、義務を感じる、こと、推測すること、疑問を呈することなどは基本的に作中人物が行うことであるということが前提とされ、人物の主観をあらわす言葉があるとすればそれを語っているのは人物であると論理的な意味から措定しているのである。Genette (1972) による「語る誰か」と「見る誰か」の分割は単純な論理的な意味からの措定に対する批判としてもとることが可能である。それまで論理的に言って人物の見方や思考を表しているとされた場合、「人物が語っている」と考えられることが多かった。そうすると極端な場合、形式的には完全な間接話法であっても、作中人物が語っていることになってしまう。これに対し Genette (1972) は、人物の見方や思考が反映されていても、それは人物に「内的焦点化」されているだけであり、人物自身がそれを言語化して語っているとは限らないということを示したといえる。三人称で語られる地の文、あるいは間接話法において「語る誰か」は基本的には語り手であり、人物ではない。自由間接話法は、この語る誰かが曖昧になるケースである。このように、自由間接話法の議論を巡っては、単純な形式に還元することも、論理的意味に還元することにも、言語間比較を考えるには特に留意する必要がある。というのも、中国語に関する話法の先行研究としては、趙 (1994, 1998) 中里見 (1996)、申丹 (1998)、顧那 (2005)、などがあげられるが、どれも「人称」と「時制」という形式的な対応について機械的に論じているのである。ところが、形式の異なる中国語、あるいは日本語でも無理やり形式を対応させるだけでは分析に限界、あるいは誤りが生じる。^{iv} これに対して、日本語における自由間接話法に関する言及のうち、伊藤 (1977)、鈴木 (1987) などは論理的な意味からのみ判断している。例えば鈴木 (1987) は、自由間接話法の日本語訳に関して、それを想定される直接話法に還元し、三人称は一人称に戻して訳出するべきであると考えている。これは論理的な意味からいって、自由間接話法が人物の思考を表しているものだから、ということを根拠にしている。しかしすべ

てを直接話法に還元するという処理の仕方は、「語る誰か」と「見る誰か」を区別していないからであると考えられる。

では、言語間の比較をする際に、単純な形式に還元するのでもなく、論理的な意味だけによるのでもないとしたら、他にどのような方法があり得るだろうか。それにはやはり、中川（1983）が言うように、文中においてそれがどのような機能を果たしているのかという点を考える必要がある。単純な形式からいえば、英語や日本語、中国語などの言語を直接対応させられないにしても、間接度の調整そのものがないわけではないはずである。では間接度とはそもそもどう分析できるのだろうか。そこでヒントとなるのが、アリストテレス以来のディエゲーシスとミメーシスの区別である。ミメーシスが物語世界をそのまま模倣して表出するのに対し、ディエゲーシス的な語りでは、外から客体化して語る。逆に言えば、外から客体化して語っているとディエゲーシス的な語りとなる。語り手による間接的な報告であるか、そうでないかという違いは、この「外から物語世界を客体化しているか否か」が大きくかわっているのではないか。このようにいってしまうと、極めて当然のことのようであるが、しかしこの観点が言語間の比較を行うのに際し、鍵となっていることを、中国語と日本語から検証していく。

2. 「物語世界の外からの客体化」による分析

(1) 今もその歌を思い出して、隣の部屋に眠っている、いや、眠らされているのは、「水死人のたぐい」のような娘ではないのかと思うと、立っていくのにためらいもあるのだった。娘がなにて眠らされているか聞いてはいないが、とにかく不自然な前後不覚の昏睡におちいつているらしいから、たとえば麻薬におかされたような鉛色に濁った肌で、眼のふちはくろずみ、あばら骨が出てかさかさに痩せ枯れているかもしれない。

（川端康成『眠れる美女』）

(1) は「おちいつているらしい」「かもしれない」など、人物のパースペクティブから描かれている。この語を英語に直訳すれば *would* や *perhaps* などが使われると考えられるから、先ほどの定義からすれば自由間接話法であるように思われる。実際にこの下線部分は Mebed (2000) が「中間の間接話法」とし、ウルフの「ダロウェイ夫人」と比べている個所である。しかし日本語話者からすると、現代日本語小説の文としては通常の地の文と考えられ、特別なものとは感じられないように思える。これは何故だろうか。前田 (2004) は「日本語では容易に主語が省略されうるために、また西欧語のような截然たる時制の区別もないので、作中人物の発言や思考を語り手のそれと渾然一体化したり、あるいは曖昧化したりすることはきわめて頻繁に起こりうるのである。こうして日本語では、語り手自身の言説と登場人物の言葉や思考が地の文の中で容易に一体化されうるので、西欧の小説におけるように、文法的な約束事に縛られることなく、またことさらに意識的な技巧を凝らす必要もなく、体験話法的な語りはほとんどどんな状況でも生まれうるといっても過言ではない」(以下、特に断りのない限り下線は引用者) と述べており、(1) はまさにその例だと考えられる。つまり、日本語の語りは人物のいる時点、いいかえれば物語状況内に移動した語りに容易に移行してしまうのである(他にも、山岡2001を参照)。文法的に言っても日本語における内的状態を表す述語はそれだけで一人称を指示してしまい、三人称をつけると不自然になる(工藤1995参照)。ということは、三人称主語の消去は文法的規則による義務的なもので、残した場合は特殊な表現技巧になる。物語状況を外から語る声がなくなると、語りと物語世界との距離が縮まってしまう。(1) は人物のパースペクティブに同化する形式だったが、次に内的感情がより強くあらわされている例を見る。

(2) 声が沈まると、参木は部屋の中を見廻した。——此の部屋の中で、競子は育った。此の部屋の中で、彼女を愛した。そうして、自分は此の部屋の中で、幾度び彼女の結婚のために死を決したことだろう。そ

れに、今は、此の部屋の中で、競子の兄から自分が行き続けるための生活を与えられようとしているのだ。何のために？　ただ彼女の良人の死ぬことを待つために。

(横光利一『上海』)

(2) の下線部分は、内的感情があらわされており、内的独白（自由直接話法）と呼んでもいいような文である。ただ、人物が独白しているかという、必ずしもそうは思えない。語り手が人物の心を代弁している通常の地の文ようにも感じられる。これは語り手の語り（地の文）が物語世界の人物の位置に入り込み、同化してしまうからである。しかし物語では、作中人物は基本的に語られる存在であり、純粹に人物のセリフを表出するにしても「ミメシス（模倣）」であるならば、やはり語り手が人物になりかわって語っていると考えられる。続いて、(3) 單純に視点の担い手となっているケースを見てみる。

(3) 信雄はしげしげと船の家を見た。廢船を改造して屋根をつけたものらしい。船には入り口が二つあり、そのどちらにも長い板が渡されている。人の気配はない。

(宮本輝「泥の川」『螢川』)

(3) では、信雄が視点の担い手になっている。そこから先は人物のパースペクティヴを基準にした語りである。山岡（2001：105～106）はこの(3)を「内的独白」と考え、「信雄が語っている」というように述べている。しかし「語っている」とは本来的には言語化しているということであり、二文目以降を信雄が言語化しているとは思われない。とはいえ、確かに信雄に内的焦点化後の語りの位置は物語状況内に移動しているように感じる。ここまであげた(1)～(3)の例は、すべてジュネットが内的焦点化と呼んだ形式であるが、日本語ではこのような場合、物語状況内に語りの位置が移動してしまいやすい。英語などでは通常、單純に視点の担い手になるだけでは、語りは外から物語世界を客体化して行われる。wouldやperhapsの存在によって自由間接話法と考えられるのは、そうではない

語り、つまり外からの語りが通常であるという前提があるからである。自由間接話法とは、基本的には間接話法である。ということは既存の理論では、物語世界を客体化する位置からの語りが基本的な位置として設定され、外から客体化する声があることが前提となる。ところが日本語ではこの前提が崩れている。日本語が英語などの語りと根本的に異なっているのは、語りが物語世界に容易に入り込むか否かの違いだと考えられる。このことが、単純な形式の比較を困難にしている。

以上を踏まえたうえで、次に中国語における例を検討する。

(4) 张老师心里一阵阵发痛。几个小流氓偷书，倒还并不令人心悸。问题是凭什么把这样一些有价值的，乃至非但不是毒草，有的还是香花的书籍统统扔到库房里锁起来，宣布为禁书呢？

張先生は心がずきずきと痛んだ。何人かの不良が本を盗んでも、それほど恐ろしくはない。問題はいったい何を根拠にしてこんなに価値のある、毒草などところか芳香な花のような本までみんな倉庫に放り込んで、禁書だと宣告するのか？

(劉心武「班主任」、太字は申丹、翻訳は橋本)^v

(4) は、自由間接話法か自由直接話法のどちらともとれる「両可型」とされ、「中国語に特殊な表現」とされた例である(申丹1998、Hagenaar1996等)。「両可型」とされる理由は、内面が表出されているにもかかわらず、判断材料となる人称と時制が存在していないからだとされた。しかしそもそも時制が表示されず、主語を省略できる中国語を英語と同じように扱うことには無理がある。「物語世界の客体化」という判断材料を導入したとすると、これは日本語の例(2)と同様に処理できる。つまり、内的感情の表出に伴って、語りの位置が物語状況内に移動してしまっている例である。中国語ではこのように、強い感情を表す時には物語状況内に入り込んだ語りになるのである。続いて、日本語例文(1)のように、人物のパースペクティブに同化し、推測を表す場合を確認する。

(5) 印家厚打住了。厂长到底要干什么呢？即便是厂长，他也不愿意被他耍弄。他干嘛要急匆匆离开车间跑到这儿踩薄冰？

印家厚は言うのを止めた。工場長はいったい何がしたいのだろうか。工場長であるなら、(彼に) 馬鹿にされたくはないはずだ。どうしても大急ぎで作業場を離れて、こんなところで薄氷を踏んでいるのだろうか？
(池莉「煩惱人生」、例文は顧那2005、翻訳は橋本)

(5) は、主人公の印家厚が工場長に日本人についてどう思っているのかと聞かれ、工場長は何を求めているのかと訝る場面である。この場合は人物の推測を表しており、(1) の用法に近い。中国語ではこのように、人物のパースペクティブに同化した推測、疑問などは自問自答形式をとると考えられる。^{vi} このようなケースでは、中国語でも物語状況内に語りが入り込むので、距離がなくなる。もちろん、単なる推測を表している場合と、先ほどとりあげた内的感情が強くなる場合は連続しているものである。

このように、中国語も日本語と同様に語りが物語状況内に入り込むことがあるが、日本語と比べると、物語世界を外から客体化して語る傾向にある。例として、顧那 (2005) のあげているものを分析する。

(6) けれどもこの社会はまだ、彼にとって直接的な加害者ではなかった。あと二年たてば大学を卒業する。いわゆる社会人となる。その時から本当の戦いが始まる筈だった。準備期間は二年しかない。その間に社会人としての資格をつくり、実力をたくわえ、狡猾さと図太さを身につけなくてはならない。

然而，这个社会对于他来说并不是直接的受害者。再过两年他就要大学毕业，也就成为“社会人”。从那时候起他才开始真正的斗争。只有两年的准备时间。在这段时间里，他必须获得“社会人”的资格，积蓄学历，学会狡猾和厚颜无耻。
(石川達三『青春の蹉跌』)

日本語の原文では「彼」に内的焦点化後、語りは「彼」の時点に移動して行われ、人称も登場しなくなる。ところが中国語訳では三人称代名詞が三つ多く加わっている。これは、中国語文は内面を外から客体化して語っているからである。また、たとえ三人称を取り払っても、外からの客体化は変わらず行われる。これは文法的には、中国語では英語などと同じように内的状態を外から客観的に記述できるからである。日本語では内的状態を表す述語と三人称の相性が悪く、潜在的な一人称になってしまい、物語状況内に語りが移動する。この点で中国語は英語型で、地の文では通常、内的焦点化されても外からの客体化する声は失われない。失われるのは、典型的には(4)、(5)のような内的感情が強く発露される場合、自問自答形式によって推測が行われる場合などである。

このように「物語世界の外からの客体化」という点に注目することによって、「人称」と「時制」の表示方法が根本的に異なる中国語も分析可能となる。具体的にどのような条件になれば物語状況内に入り込んだ語りになるのかについては、文法的な記述もさらに必要である。

ここまでの用例をみると、(A)感情や心理を強く表出される場合、(B)人物のパースペクティヴに同化する場合の二種類が考えられた。自由間接話法は、実は地の文に近いものから、自由直接話法に近いものまで、バラエティーに富んだものである。これが整理されずに議論されることも、言語間の比較において混乱が生じる原因でもある。ここでは、間接度において(A)、(B)の中間にあたる(C)感情や心理が、弱く表出される場合を加え、ケースを分けて言語間の分析を続ける。

3.(A)人物の感情や心理を表出する場合、 および自由間接話法と自由直接話法の連続性

自由間接話法を使用した例として有名なフローベールの「ボヴァリー夫人」から用例を見てみる。

(7) Puis, il se demanda ce qu'elle deviendrait, si elle se marierait, et à

qui? Hélas! Le père Rouault était bien riche, et elle! ... si belle! Mais la figure d'Emma revenait toujours se placer devant ses yeux,...

それから彼は、あの女はこの先どうなるだろう、結婚するだろうか
と考えた。結婚するとすれば相手はいったい誰だろう。ああ、ルオー
じさんはよほどの金持ちだ。そしてあの女は！……あんなに美しい！
しかしエンマの顔が始終シャルルの目の前に浮かんできた。

(フローベール『ボヴァリー夫人』)

(7) は、エンマのことを考えているシャルルの内面が表出されているところである。形式からすれば間接話法であるが、感嘆符や短文の多用など、全体のリズムに臨場感がある。このため、語りの位置が物語世界内に方向づけられ、距離が小さくなる。人物の内面の声が直接出ているように感じられ、外からの客体化する視点が少なくなる。(7) は、自問自答文であるが、自問自答ということでは中国語の (4)、(5) も同じであった。自問自答する際、登場人物が自らに問いかけている形になるので、物語状況内の発話になりやすい。自由間接話法の例としてよく取り上げられるフローベールやウルフの用例でも、このように感情を強く連続して表出するもの、自問自答文も多い。このような文型をとるとき、形式は間接話法でも効果としては自由直接話法に近いものとなる。したがって、日本語の翻訳としても、主語が消去される形での物語状況内発話としてほぼ差し支えないように思われる。つまり、「想定される直接話法に還元」しても、原文との大きな差異はない。

4. (B) 人物のパースペクティヴに同化する場合 (人物が焦点人物になる場合)

すでにみたように、日本語においては感情が表出される場合だけでなく、視点を担う人物になった際でも語りの位置が物語状況内に移動し、人物のパースペクティヴに同化することが多い。英語などでも、自由間接話法の指標とされるもののうち、*would* や *perhaps* などを用いたものでは、感情

を表出したものというよりは、パースペクティヴを表している場合がある。

(8) Perhaps a wild rose might be like those colours and he remembered the song about the wild rose blossoms on the little green place. But you could not have a green rose. But perhaps somewhere in the world you could.

たぶん野ばらはそういう色かもしれない。緑の野辺にさく野ばらのことが思い出されてくる。しかし、みどりのばらなんてない。でも世界のどこかにはあるかもしれない。

(9) It would be better to be in the study hall than out there in the cold. The sky was pale and cold but there were lights in the castle. He wondered from which window Hamilton Rowan had thrown his hat on the haha and had there been flowerbeds at that time under the windows.

こんなさむいところより、自習室にいるほうがいいな。空は青じろくてつめたいが、お城にはあかりがともっている。ハミルトン・ロウアンはどの窓から、堀へ帽子をなげたんだろう？ そのころ窓の下に下段はあったのかしら？

(ジェイムズ・ジョイス『若き芸術家の肖像』)

(8)、(9) はジョイスの『若き芸術家の肖像』の第一章からの引用で、日本語訳は丸谷によるものである。この章は主人公スティーヴンの年齢に合わせて簡単な言葉遣いがなされており、人物の言葉を模倣しているとされる。とはいっても物語世界はあくまでも客観的に距離を持って報告されている。(8) では自由間接話法のマーカーとされる perhaps、(9) では would が使用されており、自由間接話法と判定される指標であるが、間接度はかなり高い。同じ名前のついている話法でも、感情が強く表出される例とは間接度が大きく異なることがわかるだろう。さらにいえば、三番目の文は完全に間接話法で、主人公のスティーヴンの内面は完全に客体化され、人

物の抱く疑問は完全に語り手によって外から捉えられている。ところが丸谷の訳文のほうは物語世界内における人物の語りであるかのようになっていることには留意したい。このように、三人称を一人称に変換する、あるいは完全な間接話法を直接的に変換する、という操作が行われる訳例は枚挙にいとまがなく、単に丸谷訳個人の趣向とは片付けられない問題である。日本語においては完全な間接話法を好まないという傾向があることは確かで、これは2節でみたように、日本語の語りが物語状況内発話になりやすいという傾向と関係があると推測される。認知言語学の見地から見ても、英語などに対して日本語が状況内発話を好むということが言われており、この関連を裏付けるものとしてさらなる検討が必要に思われる（中村2004参照）。

5. (C) 人物の感情や心理が弱く表出される場合

最後に、間接度が中間に位置する、人物の感情や心理が弱く表出される場合をみる。これは外からの客体化が行われつつも、内的感情も表出されるというもので、典型的には間接話法（もしくは地の文）から内面に滑り込んでゆく時、あるいは逆に直接話法からの移行する時に使われる。自由間接話法は二重の主体をもつ話法であり、この形式はそのどちらともいえない曖昧性を十分に発揮できる技法である。ゆえに、翻訳などにおいても工夫が必要な用法だと考えられる。具体例を見る。

(10) Ugly and futile: lean neck and tangled hair and a stain of ink, a snail's bed. Yet someone had loved him, borne him in her arms and in her heart. But for her the race of the world would have trampled him under foot, a squashed boneless snail. She had loved his weak watery blood drained from her own. Was that then real? The only true thing in life?

醜くて空しい、細い首、もしゃもしゃの髪の毛、インキのしみ、カタツムリの寢床。でも、どこかの女がこの子を愛した。彼を腕に抱き心にかけた。彼女がいなかったら世間の生存競争に巻き込まれて踏み

にじられていただろう。ぐしゃりつぶれた骨なしのカタツムリ。彼女はわが血を引くこの弱い水っぽい血を愛した。じゃあ、あれは実在していたのか？人生でただ一つの真実なのか？

(11) Her door was open: she wanted to hear my music. Silent with awe and pity I went to her bedside. She was crying in her wretched bed. For those words, Stephen: love's bitter mystery.

Where now?

母の部屋のドアをあけておいて。ぼくの歌を聞きたがったから。ぼくは恐れと憐れみに打たれて、黙ってベッドのそばへ行った。母ははじめなベッドのなかで泣いていた。あの言葉がね、スティーヴン。愛の苦い秘儀のことどもについていうのがね。

今はどこに？ (ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』)

(12) いま望むのは、一人になることだけ。ツヴィは黙っている。出て行くべきだとわかっている。でも出て行きたくない。

(B・イエホシュア『エルサレムの秋』)

(13) 不要同我谈女人。(「她」のセリフ)

那么谈什么？(「你」のセリフ)

谈谈你的童年，谈谈你自己。她不要听你的那些故事了。她要知道你的过去，你的童年，你的母亲，你的老祖父，……

私に女の話を話さないで。

なら何を話す？

君の子供のころのこと、君自身のことを。彼女はもう君のああいいう話は聞きたくない。彼女が知りたいのは君の過去、君の子供のころのこと、君の母親、君のおじいさん… (高行健『靈山』、翻訳は橋本^{vii})

(10) の点線部分は、作中人物であるスティーヴンの声を反映している

ものであるから、自由間接話法だが、(7)のように感情を強く表出している文とは異なる。感情を強く表出しているパターンでは、語りが物語状況内に入り込み、人物が発話しているように思われるが、(10)の点線部分ではまだ間接度がかかなり高い。そして太線部分では、やや強く感情が表れている。ここでは徐々に内面に滑り込んでおり、人物の内的な声が、語り手の外からの声のにせられて聞き手に伝えられる。(11)の構造はもっと複雑で、三人称から一人称に切り替わり、一人称から中間的な話法「where now?」につながる。

(11)の日本語訳は、最後の文が「今はどこに?」となっているが、これは工夫された訳であるといえる。というのも、「今はどこだろう。」というように訳すと、日本語では通常の地の文になってしまう。すると、日本語では語りが人物の位置に同化してしまい、外からの客体化がなくなる。また、「今はどこなのかな」というように訳すとやはり直接度が高くなりすぎる。

(12)の日本語は、やはり工夫されたものといえるだろう。これを「いま望むのは一人になることだけである」、「しかし出ていきたくはない」というように訳すと、やはり通常の地の文になってしまう。それに対して、「一人になることだけ」とすることによって、外からの客体化する声がありながら、内面の感情もあらわされているといえる。

(13)は、「彼女」と「君」が対話している場面だが、「谈谈你的童年, 谈谈你自己 (君の子供のころのこと、君自身のことを。)」という命令形が自由間接話法となり、三人称の地の文につないでいる。中国語の場合は時制や助詞等、形式に明示される要素が少ないので、コンテキストに依存する率が高い。とはいえ、命令形や疑問形は英語などにおける場合と同様に自由間接話法になる場合が多い。日本語では推測、疑問は地の文でも簡単に起こってしまうので、外からの視点を加えるには(12)のような工夫が必要だと考えられる。

6. まとめ

以上、「物語世界を外から客体化するか否か」という点に注目しながら、話法の間接度の言語間比較について考えた。この点からみると、日本語における語りのひとつの特徴は、内的焦点化にともなって物語状況内に移動しやすいということである。このことが話法の対応において混乱を招いている一つの原因でもあるだろう。また、形式的に表示される要素が少ない中国語も、この観点で分析が可能になることを見た。しかし、本稿の分析だけでは、個別の文例を判断することはできるが、一般的な規則の記述にはなっておらず、さらなる検討が必要である。また言語間の比較は、一般理論に寄与する可能性を持っている。例えば日本語の語りが物語状況内に容易に移動するとしたら、外からの客体化を前提としてつくられている従来の視点理論を書き換えられるかもしれない。過去時制を形式としてもたない中国語の語りの分析は、いわゆる「歴史的現在形」の問題や、語りの位置に関する理論、「過去形は過去の意味を担うか否か」という問いを分析しなおすことができるのではないかと思われる。これらも今後の検討課題としたい。

例文出典

Flaubert (1971) *Madame Bovary*, Garnier Frères (フローベール、伊吹武彦訳『ボヴァリー夫人』岩波文庫、1960改版)

アブラハム・B・イエホシュア (2006)、母袋夏生訳『エルサレムの秋』河出書房新社

James Joyce (2008) *Ulysses the 1922 text*, oxford world's classics (ジェイムズ・ジョイス、丸谷オー・永川玲二・高松雄一訳『ユリシーズ』集英社文庫、2003)

James Joyce (2000) *A portrait of the artist as a young man*, oxford university press. (ジョイス、丸谷オー訳『若い芸術家の肖像』新潮文庫、1994)

川端康成 (1991) 『眠れる美女』新潮文庫

高行健 (2000) 『靈山』天地圖書

宮本輝 (1991) 『泥の川』『螢川』角川書店

横光利一 (1991) 『上海』講談社文芸文庫

引用文献

- Genette.G (1972) *Figures III, Édition du seuil à paris*, (ジェラルール・ジュネット 1985『物語のデイスクール』書肆風の薔薇)
- 顧那 (2005) 「一人称小説における自由直接話法と自由間接話法——日中比較の視点から」『表現研究』82号、表現学会
- Hagenaar, Elly (1996) Theo A.J.M. Janssen and Wim van der Wurff ed., *Reported Speech: Forms and Function of the Verb*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company (中里見敬訳 2000「中国語における自由間接話法」『言語科学』第37号 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会)
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現』ひつじ房
- 伊藤只正 (1977) 『燈台へ』開明書院
- Leech and short (1981) *style in fiction*, Longman.inc, New York, (リーチ、ショート『小説の文体』2003、研究社)
- McHale (1978) *Free indirect discourse, A journal for Descriptive Poetics and Theory of literature*
- Mebed.S (2005) 「川端康成の『眠れる美女』と自由間接話法：ウルフの『ダロウェイ夫人』の文体との比較研究」『東海大学紀要』人文学・健康科学研究編
- 前田彰一 (2004) 『物語のナラトロジー』彩流社
- 中川ゆきこ (1983) 『自由間接話法』あぼろん社
- 中村芳久 (2004) 『認知文法論Ⅱ』大修館書店
- 中里見敬 (1996) 『中国小説の物語論的研究』汲古書院
- 鈴木康志 (1987) 「ドイツ語体験話法の訳し方——時称・人称の変換操作」『外国語教育論集』筑波大学外国語センター編、筑波大学外国語センター 第9集
- 申丹 (1998) 『叙述学与小説文体学研究』、北京大学出版社
- 山岡實 (2001) 『語りの記号論』松柏社
- 趙毅衡 (1994) 『苦悩の叙述者』北京十月文芸出版社
- 趙毅衡 (1998) 『当説者被説的时候 比較叙述学導論』中国人民大学出版社

註

- i ただし、用語の使い方にぶれがないわけではない。例えば Leech and Short (1981) 自直接話法の「自由」を、語り手による介入があるかどうかという観点から考え、直接話法に存在する伝達部と引用符の両方、または一方を取り去ったものと定義している。しかし、引用符がある場

- 合とない場合では語り手の介入度には差があり、同列には扱えない。
- ii 20世紀における自由間接話法に関する議論の整理は、中川（1983）が詳しい。
 - iii この例文は Leech and short（1981）による。
 - iv 「人称」と「時制」による機械的な分類による困難さは、橋本陽介（2009）「『語調』による話法の間接度調整について——日本語と中国語の分析から——」『文体論研究』第55号、2009）を参照。
 - v 申（1998：P307）
 - vi 大東和重（2003）「恋愛妄想と無意識——『蒲団』と中国モダニズム作家・施蛰存」『比較文学研究』は、田山花袋の『蒲団』の「だろう」など、人物のパースペクティヴによる地の文が自問自答文に翻訳されていることを指摘している。
 - vii 『灵山』には日本語訳（飯塚容訳『霊山』、集英社、2003）があるが、本稿の論点を示すために、ここでは拙訳を用いた。